

匂い

サンゴ礁

「せんばい！」

「寝てるんです？」

「このまま寝てたら休憩終わっちゃいますよ。」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

「……………」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

カーテンから漏れ出る光を避ける、上体を伏せた体勢で腕を伸ばした。

ピ。ピ。ピ。ピ。

ぐう

目を開ける。時計を止めたままの姿勢で寝ていた。止めてから数分経っただろうか。

そうだ、タイマーを切り忘れていた。そのせいで、こんな早くに起きる必要のない、今日の惰眠を邪魔された。仕方ないか、少しでも気合を入れて、ベッドから足を下ろす。

「痛っ。」

下を見ると、段ボール。ああそうだった、引越しの準備がまだ終わっていなかった。

朝ご飯をゆっくり食べられるのは久しぶりだ。

まあ、いつものように食べ終わってしまったが。皿をそのままに、がらんとした部屋を見渡す。冬服など当分着ない服をしまっただけだが、随分片付いたように思う。

今日の夜行バスで出るから、昼までに片づけを終えてしまえばいい。この分なら、楽勝か。

最後に、テレビの周りに散乱している細々とした物の片づけを始める。小さいものが丁度置きやすいのもあって、思ったよりも物がある。

「何だ、これ。」

その小物類の中に、香水があった。買った覚えはない。たぶん新品。恐怖を感じないでもないが、何か引っかけかりを覚える。喉元まで出かかっているんだが。……持つて帰るか。

夜行バスに乗り込んだ。あとは着くまで寝るだけ。

時、会ったな。何を話したんだったか。…寝るか。

「あ、起きましたね、せんぱい。」

「おはようございます。」

「……おはよう……。」

「…前から、思っていたんだが、君は暇なのか？」

「わざわざ、三年の教室に来て。」

「暇じゃないですよ。」

「暇じゃない後輩が遊びに来ているのに、せんぱいは寝ていいんですか。」

「あーハイハイ。」

「もう、つて予鈴！」

「次どこよ、」

「214教室です。」

「なら、途中まで同じだな。」

…夢…。

懐かしい。高校の時か。あの後輩は元気にしているだろうか。もう卒業以来会ってない。

？卒業、以来か……いや…違うな、最後に帰省した

「ただいまあ。」

「おーおかえりー」

「おかえり。昼ご飯はもう少し待ってね。」

「おー」久々に帰ってきて、この変わらなさに、心が安らぐ。自室を覗くと、きれいに掃除されているが、あの頃のままだ。ありがたい。…手荷物の整理だけでも、しておくか。

「あ。」取り出した香水。思い出した。この香水は最後に後輩に会ったときに、預けられていた物だ。たしか、親が苦手な匂いだから持っていてくれないか、と渡されて。

いつ頃、返せばいいのだろうか。家まで送っていったことがあるから家は分かる。……昼を食べたら持つていつてみるか。

家の前まで来たが、どう言うべきだ？預かってから三年は経っている、覚えているのか？……悩んでも意味ないか。

ピンポーン

はい…

「桃木香織さんのお宅で合っていますか。高校の時の先輩で、先橋といいます。香織さんはご在宅ですか。」

…、…、一度、お上がりになってください。

「？はい。」

彼女は、二年ほど前に、亡くなっていたようだ。持病が、原因だったそうだ。香水に関して、言い残していたようで、この香水は、僕が持っていてくれとそして、手紙。

気づいたら、家の近くまで帰ってきていた。すぐに帰る気にもなれず人の少ない公園に向かう。

…

…

ベンチで、またぼーっとしていた。

手紙を、読むか。

「せんぱいへ

この手紙を読んでもることは、香水、預けっぱなしにしちゃいますね。

あ、捨てないでくださいよ。私が一番好きな匂いなんですから。

よかったら、せんぱいも使っていていいですよ、あーでも、無くさないでほしいです。

これが、せんぱいに話す最後だから、言いますね。

わたし、せんぱいのこと好きなんですよ。

気づいてました？気づかれてたなら、ちよつと恥ずかしいですけど。

ほんとは、ちゃんと直接言いたかったんですけどね。後に後につて先延ばししたら、言い損ねちゃいました。

せんぱいは長生きしてくださいよ。」

新品の香水に、手を伸ばす。
リラと書かれている。
自分自身に、吹きかけてみる。

「あれ、せんばいじゃないですか。」
デパートで、偶然あった。

「学校でしか会わないから、私服って新鮮ですね。」

「せんばいは何買いに来てたんす？もう買い物終わってるようですけど。」

「母に頼まれて。いろいろと。」

「あー。」

「そういう君は？」

「わたしですか？香水です！」

「香水。」

「結構、こういうの好きなんですよねー。」

「あ、でも、今日一番好きな匂いを見つけたんですよ。」

そういつて、テストターを僕に吹き付けた。

「ごほっごほっ」

「ふふ、ごめんなさい、せんばい。つい、イタズラしたくなっちゃって。」

イタズラが成功した彼女は、きれいに笑っていた。
ああ、思い出した。これは、この時の、香水か。

あの時のように、目が沁みている。

「わっ。」

きよろきよろしながら歩いてたから、人にぶつかった。

「っと、ごめん。大丈夫？」

ぶつかった人は、私より少し年上で花束を持っている。

「あ、ごめんなさい。わたし、前を見ていなかった。」

「ううん。ぼくも見えてなかった。ごめんね。」

「…君は、ここに入院してるの？」

「うん。」

「そっか。…この花、どうぞ。早く良くなるよう

に。」

「え、あ、ありがとう。」

「香織——？」

「あ、お母さん。」

「呼ばれてる？うん、じゃあぶつかってごめんね。元気になってね。」

そう言ってお兄さんは進んでいった。

「香織？」

「あ、お母さん！」

「その花、どうしたの？」

「えっと、ええと。貰ったの！」

「そう。あとで花瓶を買ってこようか。」

「ねね、お母さん！このお花って、なんて名前？いい匂いがするの！」